

優秀賞

七時限目のバースデーソング

アメリカシカゴ双葉会日本語学校全日校三年 久保 いろは

「ハッピーバースデートゥーユー。」

その時のクラスの光景は今でも脳裏に焼きついて
いる。多様な人種が集まる多民族国家で、私の心に
何かが生まれた瞬間だった。

父の仕事でアメリカに引っ越してきた私は中学生
になり、他文化に興味をもち始め、アメリカの現地
の学校へ行くことを決断した。しかし、いざ通い始
めると、母国語のない日々、多種多様な文化を持つ
人々に圧倒され、なかなか友達を作ることができな
かった。ものの見方や価値観など全てが自分と異な
る人々の波に飲まれ、自分が周囲と違うということ
を痛感し、私は周りの人達との間に大きな壁がある
ように感じていた。

ある日のことだった。いつも通りに七時限目のク
ラスへ行くと、一人の生徒がクラスのみんなに声を
かけていた。その日が誕生日の友達に歌をプレゼント

トしようと言うのだ。サプライズ好きなアメリカで
はよくあることなため、私達は普段通り和気あいあ
いと歌った。

「ハッピーバースデートゥーユー。」

歌い終わり、先生が授業に戻るよう声をかけた。
すると、

「ハッピーバースデートゥーユー。」

一人の女の子が歌い始めた。初めはまだ歌ってい
るのかと思ったが、何か違うことに気がついた。彼
女は韓国語で歌っていた。クラスの視線が彼女に集
まる。私は呆然と見つめていた。共通言語が英語の
集団の中で、他人と異なる祖国の言葉や文化を表現
する。それは自分が一番避けていたことだった。彼
女の行動が理解できなかった。

すると一人の生徒が言った。

「私も歌える。」

その生徒も自国の言葉で歌いだした。他の生徒達も続くようにして母国語を話すものもいたり、友達の言葉を真似したりしていた。私はその光景に胸が熱くなったのと同時に驚きを覚えた。一つの歌の中で個を主張する。そこに他人が主張を重ねて、その中で互いを理解し尊重し合う。教室内でのこの一瞬は帰国子女という国際人である私がどうあるべきかを物語っていた。「壁」だなんて言葉を利用して、異文化を持つ人々に歩み寄ろうとしなかったのは自分だと気づき、一人一人と正面から向き合おうと思えた瞬間であった。

その後私は沢山の人と交流を交わした。インド人の友達に民族衣装を見せてもらったり、メキシコ人の友達と伝統料理を食べたりした。

国、人種、宗教を越えて分かり合えたこのアメリカでの生活は自分の中で大きな財産だと言える。グローバル化が進む今、将来は更に他国との交流の場は増していくだろう。その中で私は一帰国子女として英語が話せるだけではなく、個人の違いを理解し尊重できる人材になりたい。たとえその方法が一つの「歌」だとしても、それも国際未来を切り開いていく大きな一歩になると強く思う。

